



【東方掌編】 春酔草紙メイクアウト

Adult only



▼
……そもそもの発端は、私が家の蔵で見つけた十冊ばかりの書籍であった。

御阿礼の子を輩出する稗田家は里の歴史を編纂するという役割を担い、そのもとは自然と郷内外の記録が集まる。それらを納めた蔵の全容については私自身も把握していない部分が多い。

そんな蔵の奥。その本はまるで押し込めるように封じられていたのである。

箱書きによれば、おそらくは先代が幻想郷縁起編纂に先立って集めたと思われる、地底の妖怪の手によると思しきものだった。

天狗の詫び証文に代表されるように、古い妖怪は独自の文字を使って多くの記録を残している。しかし妖怪の書いた書籍は多く妖魔本として扱われ、災いを招くとして敬遠されていた。まして、妖怪への敵意が強かった時代には好んで集めるものなどよほどの

変わり者に限られていただろう。手に入れはしたものの先代も持て余し、縁起の編纂を終えるまでに手を付けることができなかつたようで、解説もそこに少しばかりの注釈を入れた程度で終わっていたのである。

おおよそ数百年前の、未知の書き手による未読の書籍、これほど知的好奇心を刺激するものがあるだろうか。秋も深まり、新嘗祭も無事に終わった霜月の初め。まとまった時間が取れたのを機会に、私は一気にこの妖魔本の解説を済ませてしまおうことにした。と、なれば頼る相手は一人である。

「本当！？面白いものが読ませてもらえるなら大歓迎よ！」

解説の話を持ちかけてみたところ、小鈴は一も二もなく顔を輝かせ、店番もほったらかしてその日の夕方には着替えて寝巻まで持参でやってきた。まあ、引き受けてもらえるのならこちらとしても渡りに船。さっそく二人で顔を突き合わせ、作業に移ることにした。

「……ふむふむ」

いつもの黄蘗色のエプロンを付けて眼鏡をかけ、腕まくりをして薄絹の手袋をはめ、慎重に書の内容を捲る。自他共に認める愛書狂の彼女にはまさに垂涎の逸品であるのだろう。

私には意味不明の、複雑な線が重なったようにしか見えない文面を、小鈴はすらすらと読みあげていく。

読めない文字を読めるようになる、という感覚は一体どんなものなのか。書を扱う者の端くれとして、最近目覚めたばかりの彼女の能力への興味は尽きない。

「阿求？」

「あ、すみません」

レンズ越しに頁を捲る小鈴の表情にしばし見とれていたらしい。顔を上げた小鈴に指摘され、私は慌てて筆記に戻る。

読めるとはいえ、小鈴には妖怪の詳しい慣習や文化までは知識が及ばない。それに捕捉を入れていくのが私の担当である。こうして大まかな内容を把握し、必要であれば類典を引いてまとめていく。大まかにいってそんな作業分担当だ。

——ともあれ。この時までには予想もしていなかったのである。この貴重な妖魔本が、春草紙——平たく言って、官能小説であったとは。



こくり、と唾を飲みつつ、友人の口を借りてためらいがちに読み上げられる描写は、情感たつぷりな闊の睦言。明らかに扇情を煽る目的なのが明らかで、恋の情景である。しかも困ったことに実に巧みな表現で、時に激しく、時に艶やかに。丹念に、じつくりと、薄絹を一枚ずつ脱がせてゆく繊細な筆致で、想いを遂げる過程が記されていく。

まだ一冊目の中ほどののだが、そこではすでに想い人と二人きりになった主人公が、嵐の小屋の中で身体を重ねあう様が切々と綴られていた。

「……………」

途中から妖しげな雰囲気になっているとは思ったものの、てっきり随筆か何かと勘違いしていたこともあり、口籠る小鈴を急か

した自分が恨めしい。いまや開き直った彼女の朗読に、耳を塞いで逃げ出したくなるほどだ。

けれど、そんなことはさせじと小鈴はじろりと私を視線で制し、殊更情感たつぷりに読み上げてゆくのである。こんな所で里の子供たち相手に培った読み聞かせのスキルを披露されても困るのだ。

お互い年頃の乙女、そりやまあ流行りの春草紙くらいは眼を通して聞いてくれど、この内容は些か刺激が強すぎる。私は自分の分担も忘れて文机の上に身を乗り出し、いつしか読み上げる小鈴の吐息や、微かに唾を飲み込む音まで聞き入っていた。

「……………うわあ……………やだ、そんなトコまで……………？」

ぼそりと挟まる小鈴の独白が、また生々しく想像をかきたてる。小鈴もまあ貸本屋なんて因果な商売をしているのだ。それなりに耳年増ではあると思っていたけど、繊細な隠喩や暗喩表現までいちいち反応しているのを見るに、相当のものらしい。

べらり、頁を捲った小鈴の顔が赤くなる。ぼんと湯気でも噴きそうな様子で、小鈴はちらりとこちらを窺ってくる。

「……………」

視線が勝ちあひ、奇妙な沈黙が生まれた。小鈴は視線で軽い非難を私にぶつけ、どうするのかと聞いてくる。

「……………そ、その、ですね」

なんともいえず微妙な間を払うため、こほんと咳払い。

「え、ええと。非常に、巧緻な文面ですね。天候に心情を託すのはカルラ草紙の影響がありますね。六・六・八の詩化の技法も鬼の恋文でみられるものです。筆者は広範な文化に通じていたのか

もしれません。著者は地底の妖怪の中でもそれなりの地位にあり、教養も深い、指導者的な立場に居たのではないでしょうか。おそらく人間の文化にも造詣が深かったようですし、古典の引用や本歌取りも見えます」

ええと、まあ、つまり。

「これは学術的な興味から、必要な事なんです。妖怪の文化と情動がどんなものかを突き止める貴重な資料なんですよ。ですから、これの解説ははまったくやましいことでもなんでもなく——」

「阿求って結構むっつり助平だよ」

「……うるさい」

頬が赤くなるのを自覚しつつ視線をそらす。まったくもって否定できない。実に巧みな心理描写とその展開に飲み込まれ、続きがとても気になっていた。

それは小鈴も同じようなものであるらしく——頬を紅くしながら、ゆっくりとページを捲り、文字をなぞる。

「ねえ、阿求」

「っ、」

思わず息を呑んだ。

「な、なんです、か？」

「阿求、こういうのって、したことがあるの？」

「……乙女になんてことを聞くんですかあなたは」

「……………」

「その、」

まあ、黙りこくってしまつた以上、お察しく下さいと言う事で。

私のことは兎も角も、むしろ小鈴がこういうのにあまり免疫がないのが意外ではあつた。御阿礼の務めがあるわけでもなし、好き

な人の一人や二人、居たっておかしくないだろうに。

「これ、女の子、どうし、なのね」

「そ、そうね」

どうも書き手もその想い人も女性であるようなのだけど、妖怪にとつては同性同士の関係というのはそんなに珍しいものではないと言う。肉体よりも精神に比重を置く彼等は、心を交わし合う事をより大切にする。それゆえのこの素晴らしい筆致なのだろうけど——

ふいに——夢中になつて乗り出していた肘が、カタン、と湯呑みを倒した。

「わ」

幸い中身はほとんど残つていなかったけれど——咄嗟に伸ばした手が、同時に伸びた小鈴のそれと触れ合う。

「……ひゃんっ」

きつとそれは多分、不幸な偶然だった。

やけにへんな声が出してしまったのは、ずっと友人の声で朗読される春草紙なんてものを聞かされ続けていたからに違いないのだけど、まあ、気にならないはずもないわけで。この状況で延々と二人きりなのだから、意識するなという方が無茶な話ではあるのだ。

慌てて引つ込めようとする手が、しかし途中でぐいと押さえつけられる。見れば、小鈴がしっかりと私の手を握つていた。え、と顔を上げればすぐ近くに緊張の面持ちの視線がある。

「……………」

なんだか思いつめた表情は明らかに尋常な様子ではなく、視線がじつところから離れない。……なんだろうか、こう、非常に

まずい事態であるのではないかと頭が警告を叫ぶ。

「……阿求」

少しかすれた声で名前を呼ばれる。それだけでぞくりときた。量がわずかに軋み、触れた手のひらが熱くなるのがわかる。

なんだろう。理由もなく、これはまずい気がした。……この雰囲気はまずい。実によくはない。うん、非常に良くない、と、思う。

小鈴が緊張に唇を湿らせ、そっと、喉を動かしたのが分かった。

ちよつと一体何を——と言いかけたところで、小鈴がこれ以上ないくらいに目をぐるぐるとさせて、相当煮詰まった様子であるのが理解できた。

「……こ、小鈴？」

——要するに、判読不能の文字を読解する能力こそあれど、小鈴自身は特段、妖魔本の魔力に抵抗があるわけでもなくて。文面を追い読みあげていた彼女を、それを傍らで聞いていた私とはまるで状況が違っていたらしいのだ。

ついでに言えば、小鈴が読み上げていた内容は、それでも大分ソフトに意訳されていたものらしかった。

私が読めていない部分まで、しつかりはつきり読みこんでしまつたせいで、小鈴はその魔力にあてられてしまつていて——そんな事に思い至つた時には、私は量の上に押し倒されていた。

——いや、そんな冷静に言つてる場合じゃなく！

「こ、小鈴、なにをっ」

「……………」

私の抗議も届かなくなつた様子で、潤んだ瞳の彼女がそつと上目づかいにこちらを見上げる。りん、とその髪飾りの鈴が音を跳

ねさせる。

人懐こい子犬のような視線が、丸いレンズ越しに私を射抜いていた。思わずそれに息を飲んだ瞬間には、首筋に熱い吐息が迫り、ぞくりと背中が震えた。

さつき読み上げられていた文面と同じ展開だと、気付いた時には熱い舌先が首に触れる。

小鈴の舌は、思つていたよりもずつと熱かった。

「ん」

「……………ひや……………う、や、やめ、小鈴っ」

仔犬が傷口を舐めて癒すように、丹念にそこを触れられ、くすぐったさが背筋を這い上る。優しい口付けがそつと顎へと滑り、小鈴の小さな舌が触れた場所が甘く疼くように熱を持つ。

りん、と鈴の音が耳に響く。

「あ……………」

なぜか不思議と抵抗感はなかった。小鈴の事はまあ、表だつて口にするわけではないけれど大事な友人ではあるのだが、こんな事をしたい相手として考えたこともない。……ない、はずだ。

——あるいは私も、気付いていないだけで、同じように、この妖魔本の魔力に当てられてしまつていたのかもしれない。

「ひやんっ……………!？」

かぶ、と耳の端を噛まれて——私ははしたなくも声を上げてしまつた。

「阿求、ここ、弱いんだ」

「……………っ」

興奮に掠れた声で耳元にささやかれ、かあつと頬が熱くなるのが分かる。友達なのに、同じ女の子なのに。……たしか妖怪同士

の場合、割合あることだと聞いていられるけれど、まさか自分がその対象になるなんて——ぐるぐると渦巻く思考が混乱をきたし、おもうように言葉が出ない。そりやまあ、さつきまであの本の中の二人がどんな気分だったのか、気になっていたけど——まさか実体験させられるなんて思いもしない。

寄り添い重なる小鈴の身体の重み、服越しの絹擦れの感触が、敏感になった肌をやけに意識させる。

もう一度、さつきよりも少し強く耳を噛まれ——私が首を竦ませた瞬間。唇を温かいもので塞がれていた。

「んっ……」

濡れた唇が触れ合い、舌先が粘膜をなぞる。子供の頃にふざけてしたことのあるような、触れ合うだけの口づけではなく、啄ばむような仕草で、小鈴は私の唇を奪う。

「っふ、……ちゅ……んむ」

「っあ、あう、ふ」

息が塞がれ、逃れようとすると先に舌が触れ、りりん、と髪飾りの鈴が揺れる。より深く——粘膜が触れ合う度、ぞくぞくと背筋が震える。ちゅ、ちゅと繰り返す音を立てる唇が、蕩けるように甘く、頭を痺れさせた。

「っは……あ」

五分近く、私の唇の『はじめて』を蹂躪して、小鈴はゆっくりと身体を離れた。陶酔と共に、眼鏡の視線が私を見下ろす。ゆっくり離れた唇に、銀の糸が伸びるのを見て——私の羞恥は限界に達した。

「こ、小鈴……っ」

乱れかけた胸元を押さえ、後ずさるように、友人から逃れよう

と試みる。

「……だめ」

そんな私をしつかりと見据えて。

「逃げちゃ、やだよ、阿求」

小鈴は強く制止の声を上げる。言うが早いか、もう一度。両手を押さえられて唇を奪われていた。

驚きが勝っていた一度目に比べて、二度目のそれはもっと、はつきりと——親友の唇の柔らかさを感じた。これまで人に触れさせたことのない場所の粘膜を重ねる行為に、処理を超えた感情が溢れだしてゆく。

「っ…………」

目元にじわりと、抑えきれない感情が浮かぶ。怖いとか、悲しいというのではなくて、もっと切実に、胸の奥が締め付けられるような——強い衝動。

私は、少なくとも今の私は、これに付ける名前を、まだよく知らない。

どちらからともなく求めた三度目のキスには、もっと積極的に応じていた。自分でも驚くくらい大胆に、小鈴の舌に自分のそれを絡める。おしゃべりな割に、小さな舌だなと感じた。わずかなためらいもすぐに消え、ちゅく、と泡立ち音を立てる唾液の音が、切ないくらいに胸を高鳴らせる。

小鈴も、この気持ちを持って余しているのかもしれない。ぎゅうと押し付けられた小鈴の胸の奥、かあと熱くなる彼女の頬と共に、際限なく高鳴る鼓動のリズムが私にも伝わってくる。

おなかの奥がきゅうっと締め付けられる、切なさが込み上げてきた。

まるで、剥き出しの心を直接触られてるような錯覚。——こう
いう事をする相手なんだから、無防備に自分を晒している訳で、
似たようなものかもしれない。

「……………」

「……………」

息が続かなくなつて唇を離せば、熱いと息がわずかに白く室内
を揺らしていた。とんでもなく頬を紅くし、すがるように私を見
つめる小鈴の、物欲しそうな表情。

たぶん私も同じ顔をしていた。

「……………」

もう止まらない。袖を引くように、小鈴の身体を引き寄せた。
畳の上、とざりと折り重なる小鈴の身体の重を感じながら口づけ
を交わす。

なんども、なんども、なんども。

舌を絡ませ、喉を反らし、互いの唇を甘く噛むようにして。繰
り返される口付けに気付けば腰が抜けてしまっていた。

「……………」

けれど、小鈴がしてくれるのは口づけばかりで、一向に先に進
まない。

受け入れる側になつているせいで思うように手を伸ばすことも
できないまま、もどかしい太腿を擦り合わせ、袴を挟むようにし
ていた。けれどまあ、服が擦れるようなもどかしい刺激ではとて
も、物足りない。焦らされるばかりで、腰の奥にくつくつと煮詰
まるような疼きが押し寄せてゆく。

「んっ……」

はしたないとは分かつていたけれど、もう我慢できなかった。
なおも情熱的な口づけを試みる小鈴を、そつとその袖を掴んで制
して。

「ね、ねえ、小鈴っ、……その、っ」

行為の続きを、ねだっていた。

「も、もつと、先、も……っ」

口をしている間にもたちまち羞恥が噴き上がる。どうにかそれ
だけ言葉を押し出して、火を吹きそうな顔を反らすだけで精一杯。
俯いて必死に声を堪えていると、小鈴が不思議そうに首を傾げ、
とんでもないことを言ってくる。

「阿求もそんな顔するんだね」

「……………」

こつちだつて必死なんだ。口を尖らせて言い返すと、小鈴はし
ようがないな、なんて言いながら、そつと身体を擦り寄せてきた。

暖かな身体が重なり、きゅんと胸の奥が疼く。

小鈴はゆつくり眼鏡を外して弦を口に咥え、じつと検分するよ
うに私を見下ろした。

小鈴に読まれている本は、こんな気持ちなのかもしれない。知
らず緊張が走り、身体が強張る。脚の付け根が、はっきり分かる
くらい、湿り気が増しているのがわかった。

すうと伸びてくる友人の手に応じるように、そつと背中を浮か
せ、帯を解きやすいようにさせて——するりと緩んだ上掛けから
肩を抜く。解かれた襦袢の下に覗く胸先に、小鈴はちゅうと吸い
ついた。

「はむ……」

「ひゃう……ッ」

お餅をそつと頬張るように、優しく歯と唇が立てられる。

熱い唇と舌先が、鋭く頭の芯にまで染み込んでくるよう。自分でするのは全然違う刺激が、身構えていないところからやってきた。その、自分の時はほとんど胸なんて触らない、のだけど。やっぱり女の子でも、他の子の胸って、気になるものなのだろうか。

「っ……っ」

たつぷり焦らされたせい、くすぐったさよりも先にきゅんと背筋を走る刺激の方が勝っていた。とく、とくと胸の奥が高鳴り、小鈴の指と唇に肌が火照りを増してゆく。

「うわ」

ゆっくりと、袴の合わせ目に入り込んだ小鈴の指が、下着の間を探り当てる。

自分でするのは、ぜんぜん違って。人と自分のそれが同じ手順を踏んでいるとは思っていなかったけど、そうじゃないやうかたはその、なんとというかとてもどこかしくて。

それが却って一番肝心なところを避けられているみたいで、指が溶けてしまいそうに熱い。ぬる、と糸を引く淫靡な響き。人差し指ですくい上げられようにされて、子犬みたいに可愛らしい声まで上げてしまう。

「阿求、下着、すごい事になってない？」

「……………っ」

そんなの言われなくても分かっている。抗議の意味も込めて小鈴を睨んでやった。くすりと微笑み、小鈴は鎖骨に舌を伸ばし、そつと噛む。

同時、私の足の隙間に手を滑り込ませ、布地の合わせ目を探るように動かした。細い指が古書の頁を捲るように跳ね、巧みに閉じ合わされた細いスリットを押し広げてゆく。自分の手ではなく、他人のそれを感じさせる動きは、ひとり遊びとは違う勝手に戸惑い、そして普段慣れてしまった自分のやり方とはまるで違う手順を踏んでいるものた。

もどかしく焦らされているようなのは変わらなかった。小鈴の薬指について自分から腰を押しつけてしまい、にち、と淫らな響きを乗せて糸を引く蜜に、かあと頬が熱くなるのを理解する。

「ん」

私の意図がやつと通じたのか。小鈴はそつと私の唇をキスで塞ぎ、丹念に指を動かしはじめた。ゆっくりと、私の弱点を探るよう指を動かし、見つけ出した敏感な場所に一番イケナイ刺激を送り込んでくる。

私もそれに意識を集中して、抗うことなく受け入れた。背筋の奥からせり上がってくるうねりに、ただ身を任せる——

「っ……っ」

じんじんと痺れるような刺激が、おなかの奥からせり上がってくる。波のような、うねりのような、頭の上まで水に溺れてしまいうような激しい衝撃。

身体を中心を押し貫かれ、息が詰まってしまいそんな感触があった。ぶしゅ、とはしたなく蜜を吹きこぼし、腰を激しく震わせる。頭が真っ白に染まり、押し返す熱いうねりに、私は何度も快楽の頂へと押し上げられる。恥ずかしながら、小鈴に触られるのは自分でするときとは比べ物にならないかった。

「……………ッ、はあ、っ、はあ……………っ」

肩で息をしながら、懸命に、小鈴の身体に縋るように意識を保つ。そんないつばいいつばいの私に、小鈴はふうむと唇を結び、「ちよとと意外ね。……阿求って、こういうの覚えてるんだと思つてた」

そんな事をのたまつて驚いたようなふりをする。私をなんだと思つてるんだ。

「覚えてませんよ。前に話したでしょう。先代の記憶なんて、縁起に関するところでくらいです」

覚えてたつて言えるわけない。そうか、と小鈴は残念そうな顔をした。

御阿礼の子だなんて言つたつて、所詮はこんなものなのだ。知つた顔で経験豊富ぶることはできたかもしれないけど、そんな装いはこの場で見せるものじゃないことくらい、わかつてる。

「阿求にはずつと覚えてて欲しかったな。せつかく勇氣出したんだから」

ああもう、そんな事を言われたら。本当に、本気にそう思つてしまふそつだ。

ぎゅう、と彼女の背中に回した手に力を。

「……どのみち忘れられないんですから、良い思い出にして欲しいですね」

「ねえ、阿求、すごい恥ずかしい事言つてるよ」

「……うるさか」

きつといま、私は絶対に誰にも見せられないような顔をしているだろう。見られないように小鈴の胸元に額を押しつけ、ぐりぐりとうよじる。

ああもう、こんな事まで言つてしまふなんて——もう、きつと、

【奥付】

「春宵草紙メイクアウト」

平成25年11月4日

求代目の紅茶会3 内プチオンリー

ビブロフィリアの休日

オルハザカサンパネチ
折葉坂三番地

(<http://oruhazaka.dojin.com/infoblog/>)
あかがね

著者 銅 おりは

※本作は「上海アリス幻楽団」様の

「東方 project」の二次創作です。



どうしようもないのかもかもしれないと理解した。興奮冷めやらぬ頭でじつと、自分が後戻りできない一線を踏み越えてしまつてころなを感じる。

「……つづき、しないの？」

「……………」

もちろん、否なんて答えることができません、私は火照る顔で不貞腐れたまま。自分の唇で、小鈴の口を塞いでやった。